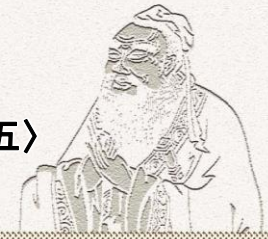


Shā shēn yǐ chéng rén  
殺身以成仁

## 身を殺して以て仁を成す〈衛霊公第十五〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄



この章の全文は次のようになっています。「子曰：『志士仁人，無求生以害人，有殺身以成仁』(Zi yuē : 『Zhì shì rén rén, wú qiú shēng yǐ hài rén, yǒu shā shēn yǐ chéng rén.』)」(子曰く「志士仁人は、生を求めて仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すこと有り」。「志士」とは志を持った人のことです。「仁人」とは人間らしい心を持った人のことです。このような人たちは人間らしい心を棄ててまでして生き永らえようとはしない。我が身を殺して人間らしさを全うするものだ、ということです。「士」とはもともと男子を表わす言葉でしたが、現在では「女士 nǚshì」という言葉が示すように、女性に対する敬称の一部としても使われます。

孔子の生きた春秋時代と、それに続く戦国時代では特に、自分の知識と才覚を認めてくれる主君を求めて各地を周遊する「有為」の男子を指していました。普段は固有の財産を持たない遊民のような存在でしたが、自分を採用し高く評価してくれる主君の為なら身命を賭して戦う覚悟を持った人たちのことです。孔子の言う「志士仁人」とはこの類の人たちと思われませんが、ここで気になるのは「身を殺して…」の一節です。

こんな話があります。孔子が生まれる百年ほど前のことです。斉の公子小白は、兄の公子糾と君主の位を争った末、これを破って斉の君主桓公となりました。この時、管仲は公子糾の臣下として桓公と戦いましたが不幸にして敗れ、公子糾は殺されました。糾の臣下として共に戦った召忽は捕われるのを潔しとせず自刃しました。ところが管仲は捕われた末に一度は殺されかけましたが、この時、桓公に仕えていた旧友の鮑叔の進言もあって一命を救われた後、桓公を善政に導き、宰相にまで上りつめた

のです。桓公は管仲の助けを得て諸侯の覇者となり、傾きかけた周王室の権威を守ることに成功しました。

この際、兄殺しの桓公に加担した管仲は果たして功臣なのか、変節者なのか、この行為の是非については、孔子の在世中にも常々議論的になっていたようです。

ある時、弟子の子貢は孔子に次のように問いかけました。「管仲非仁者與？桓公殺公子糾，不能死，又相之！(Guǎn zhòng fēi rén zhě yú? Huán gōng shā gōng zǐ jiū, bù néng sǐ, yòu xiàng zhī!)」(管仲は仁者に非ざるか。桓公公子糾を殺すも、死すること能わず、又た之を相く)〈憲問第十四〉。管仲は主君の公子糾を桓公に殺されたにもかかわらず、自ら死を選ぶことさえできず、兄を殺した桓公の下で宰相にまで成り上がった。仁者とはいえないのではないかと。

これに対して孔子は次のように答えています。「管仲相桓公，霸諸侯，一匡天下。民到于今，受其賜(Guǎn zhòng xiàng huán gōng, bà zhū hóu, yì kuāng tiān xià。Mín dào yú jīn, shòu qí cì)」(管仲桓公を相けて、諸侯に覇たらしめ、天下を一匡す。民今に到るも、其の賜を受く)。桓公は管仲の助力によってはじめて平和裏に天下を正すことができた。百年後の今も民はその平和の恩恵を受けている。もし管仲がいなかったらどうなっていたか……、と言って管仲の行為を強く弁護しています。

孔子はまた子路に対しても、同じような問いに同じような答え方をしています。「身を殺して仁を成す」とは、必ずしも安易に死を美化する言葉ではなかったようです。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)